
最強の無能力者

まさかさかさま

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

最強の無能力者

【Nコード】

N9760W

【作者名】

まさかさかさま

【あらすじ】

能力が全てのこの世界。才能が全てのこの世界。
弱い者は淘汰され、常に強い者が上に立つ。異能力とはなんなのか、超能力とはなんなのか。

ただ平和に暮らしたかった無能力者、異無 良人は、ある日『烏合の衆』^{レジスタンス}に目を付けられ、異能の戦乱に巻き込まれていく。

これは、一人の無能が世界に喧嘩を売る話。

序章

それは異常な光景。

有り得ない状況。

対峙するは、絶対の超能力者と一人の無能力者。

ただ対峙しているだけなら問題は無い。

この光景の異質さは、その戦況にある。

圧倒しているのだ。

無能力者が、超能力者を。

一本の棒切れを持った無能力者が、悪魔の光鎧を纏う超能力者を。

無能力者は既に瀕死の重傷。超能力者は全くの無傷。

にも関わらず。怪我などものともせず。

超能力者は、無能の雑魚一匹に追い詰められていた。

「ふざけるな……。ふざけるな、ふざけるなふざけるなふざけるな
虫がああああ！！」

超能力者は叫び、右半身に全念力を注ぎ込む。

瞬間、右の義手が、右の義足が、右の義眼が、右半身が、けたたましい轟音と共に吹き飛び、代わりに大質量の光の噴射が右半身を形作る。

「冗談じゃねえ、いよいよ化け物だ。」ライトアップ「右軽光」とはよく言ったもんだな」

出血過多とダメージで、今意識があること自体が奇跡の無能力者は、本当に冗談でも見るかのように苦笑いで嘔く。

ライトアップ「右軽光」。学園最狂の強化能力と謳われた異能力。

読んで字の如く、右半身を代償に光の鎧を纏うことの出来る、常軌を逸した異能力。いや、その速さとパワーは正に“超”能力と呼ぶに相応しい。

「潰れる虫いいいい！！」

異形の超能力者の姿が消える。

瞬きする間もなく、無能力者の顔面へ閃光の右拳が突き出される。文字通りの光速移動。超能力者の通った跡は、幅何メートルにも亘って抉られている。

およそ人間の反射神経では死んだと気付くことすら許されない速さ。光の速さで迫り来る物体を避けることは、まず不可能。

不可能のはずだ。

だがそもそも、無能力者は人間ではない。

「……っつ！」

ゴツ、と後方の地面が吹き飛ぶ。無能力者は爆風で更に傷を増やすが直撃ではない。

何が起きたのか、超能力者の理解が追いつかない。

いや、起きたことは分かる。斬られたのだ。光の噴射により狂化ライトアップされた右腕を。そして切断された右腕は、勢いそのままに無能力者の後方の地面に激突したのだ。

そんなことは分かっている。

なぜ何の力も通っていない棒切れで、右腕を斬られたのかが分からないのだ。

「まただ。また、斬りやがった……」

爆風で倒れ伏す瀕死の無能力者に恐怖の目を向ける。

早く次の行動に移らなければならぬが、能力の反動で動けない。その間に、やはりソイツは立ち上がる。

絶対の超能力者を前に、やはり無能力者は立ち上がる。

「何だ……」

ポツリ、と。気付いたら咳いていた。

言わずにはいられなかった。

聞かずにはいられなかった。

単純にして、明快な一つの疑問。

「一体、何なんだお前は！？」

ソイツは何でもないかのように返答する。

「無能力者だ」

一話

例えばの話。

そう、これは例えばの話。

もし登校中、路地裏で一人の女の子が襲われていたとしたら。もしその子がクラスの同級生で、美少女と呼ばれるべき類の子だとしたら。

しかも、携帯の充電は切れていて、警察に通報は出来ない。

こういう場合、俺は一体どうすればいいのか？

選択肢は三つ。

- 一、なけなしの勇気を振り絞り、女の子を助ける。
- 二、何も見なかったことにする。
- 三、そわそわする。

俺的には三がオススメ。

これならば、助けようとはしましたが足が竦んで動けませんでした。見捨てるつもりはなかったんです。その他の素通りしてく奴らよりずっと良い子です。僕は悪くない。

と、労力を要さずに自分への言い訳が成り立つ。

という訳で俺は、そわそわしながら路地裏の光景を傍観。

ああ、助けないとなー。

でも俺には無理だしなー。

足が震えて動けないなー。

……。

アホらし。

別に足なんぞ震えていないし、自分への言い訳なんかどうでもい

いいし、他人がどうなるうと知ったことではない。
なのに俺は何をやっているのか。
まあいいか、素直に見なかったことにしよう。
さあ登校登校。達者でな、名も忘れた同級生。

普段の俺ならそうしていただろう。
だが今回は場合が違う。

例えばの話。

そう、これは例えばの話。

もし登校中、路地裏で一人の女の子が襲われていたとしたら。もしその子がクラスと同級生で、美少女と呼ばれるべき類の子だとしたら。

しかも、携帯の充電は切れていて、警察に通報は出来ない。

更に、ここにもう一つの要素が加わる。

もし、襲われている女の子が、寝たきりの妹と瓜二つだとしたら？

選択肢は三つ。

俺が選ぶのは……。

「おはよう、お二人さん。仲良く二人で登校かい？俺も混ぜてくんねえかな」

……選択肢、四。陽気に挨拶。

突如現れた闖入者に、ビクッと顔を向ける妹似の少女。

「あ、え、ええと……あ、あの、助け……て」
少女が妹と同じ顔で、そんなことを言う。恐怖に歪んだ顔で、助けを求める。

ちっ、まったく人の心をもてあそぶ面である。

「やあ、名も忘れた同級生」

ところで、こいつの名前、なんだっけか。そもそも入学式はつい三週間前だったから、覚えていなくても仕方ないだろう。いや、普通なら三週間もあれば同級生の名前なんて自然に覚えてしまうものだと思うが、覚えていないものは覚えていない。

実に俺の気を引く容姿だったため、顔だけは覚えていたのだが。いくらなんでも、妹の顔を忘れることはないからな。

さて、そんなことより、どうしたものか。

ついしやしやり出て来てしまったが、何をどうすればいいのか全く考えていなかった。

まあ、あれだ、まずは状況確認からだ。何事においても、周囲の状況を把握しなくては始まらない。

場に居るのは、俺と、名も知らぬ妹似の同級生と、そして名も知らぬ同級生を襲っている白い学生服を着た女生徒。

ややこしいから仮に襲われていた方を“名無しの奈々子”、襲っていた方を“白子”としよう。

白子の特徴は、白い制服に、肩に掛かるぐらいの真っ白な髪の毛、白く綺麗な肌、腕にはアンティークな変わったデザインの白銀の腕時計。全身白づくめである。なんか、どこかで見たことがあるような気がするが、はて。

で、状況を簡単に一文にまとめると、『白子が奈々子の首にナイフを突きつけている』だ。

金目当てのカツアゲにしては随分と物騒な得物である。単なる一学生が裸で持っていていいような代物ではない。

「……あんた」

どうやって血と涙と金を流さずに場を収められるか思考していると、小さくも透き通った聞き取りやすい声で、白子が俺に話し掛けた。

ん？ と、意識と視線を向ける。暗くて顔はよく見えないが、その表情は多分渋面だ。

そして、ゆっくりと口を開き、言葉の続きを呟く白い少女。

「そんなだから死ぬのよ」

白い少女は、確かにそう呟いた。

そう、“呟いたのだ”。俺の耳元で。

「……っつっ！」

いつの間にもここまで移動して来たのか。

彼女はつい先程まで奈々子に詰め寄り、ナイフを突き付けていた。距離にして、七メートルぐらいあっただろうか。

それが次の瞬間には、耳元で俺に囁いていたのだ。

まるで、“移動する”という描写を抜き取ったかのように。まるで、俺との“空間”など元から無かったかのように。

背筋に凍りつくような悪寒が走る。

彼女はナイフを持っていた。彼女はすぐ横に居る。そして俺は、今さっきの場面の目撃者。この状況から次の彼女の行動を予測するに、ろくでもないことが起きるだろう。

即ち、すぐにでもナイフで首を掻っ切ることの出来る位置に白子はいる。

脳が命の危機を察知し、なかば条件反射のように白い少女へと振り返る。

……が。

誰も、居ない。動いた気配すら無かった。

最初から誰も居なかったかのように、忽然と姿を消してしまっていた。

……何がしたかったんだ？

俺が現れたから逃げていった、のか？ 全く訳が分からない。それに、こちらを見るあの渋面。あの言葉。俺のことを知っているの

か？

いや、いい。今は助かったことを素直に喜ぼう。ただの不良女子か何かだと思っただが、まさかあそこまで危ないやつだったとはな。

「おい、大丈夫かお前。えー、と……名無しの奈々子」

ぺたん、と座り込んでいる妹似の少女に語りかける。気が抜けてしまったのだろう。何故こいつが、あのような危なっかしい女に追い詰められていたのかは分からないが、やはりそれこそ俺の知ったことではない。世界は広い。どこの物語の主人公のように、事あるごとに他人様の人世なんぞに介入していたらキリがない。

「……ななこ？ あ、ええと、はい、大丈夫です。助けていただきありがとうございます御座います」

ぺこりと深くお礼を述べる奈々子。見事な九十度だ。あだ名を三角定期に改名してやってもいいぐらい綺麗な九十度だ。

「あの……異無さん、でよろしいんですね、お名前。同じクラスの」

何が不安なのか、おずおずと尋ねる。まあな、とだけ一言。

「お、そっぴや時間やばいな。じゃ俺はこれで」

早くしないと遅刻するぞ、と背を向け退散しようとする路地裏から出る。

はあ、柄にも無いことするもんじゃないな。少し急がないと間に合いそうにない。俺のクラスの担任教師は“大人も泣く鬼教官”で有名だからな。泣く子が黙る方が有益だというに。

思考を切り替え、急ぎ足で学園のある方向へと……

「あ、あのっ！」

走り出そうとすると、先程の少女が路地裏から飛び出て、声を掛けてきた。

「何だ？」

手短かに聞き返し、

「な、名前っ」

「だから、異無。異無ことなし 良人りょうじんだ。さっき、お前自身言っただろ？」

「い、いえあの、そうじゃなくて、ですね。えと、私、の名前……」
「何だ、もつたいぶってないで早く言え。担任の火雷からいに殺されるぞ」
「す、すみません」

「いいから」

「う……はい。奈々乃、です。奈々乃ななの 水羽みづです」

「あー、はいはい」

それだけ言い残し、さっさと走り出す。とんだ時間を食ってしまった。

妹がまだ寝たきりじゃなかった頃は、元氣過ぎて手に負えないぐらいのやつだったんだがな。俺の妹と違って随分ノロノロした奴だな、奈々乃。

……奈々乃……奈々子。

おしい。一字違いだったか。

近年、異能力なるものが発見され研究されている。

いや、近年といっても、歴史的観念から見ての近年であり、俺達基準での近年ではない。それこそ何十年単位での話だ。

大体、俺の親父が生まれた前後の年だから、五、六十年前になるのか。

その年代までは、石油やガスなどの化石燃料が一般的に使用されていたらしいのだが、コストもエネルギーも応用力も上回る“念粒子”の実用化が成功してからは完全に廃れてしまい、今では一部の古物趣味の人間が使う程度。

念粒子が実用化された当時は、どこの国も環境問題がなんちゃらコストダウンがなんちゃらで大喜びだったそうさ。

もちろん、実用化に伴い、それなりの損失もあったという話だが、その損失の何倍もの収益が得られたのだから万々歳だろう。

そんでもって、この“念粒子”の捻出方法だが、ここが最大の利点で、やるうと思えばいくらでもエネルギーを放出し続けることが出来るという、化石燃料時代から見れば夢のシステムである。

簡単に要約して説明すると、世の中には二種類の“力の本質”というものがあり、大まかに『外気』と『内気』に分かれる。

生物や植物など、有機物に宿る“力の本質”が『内気』。物体や空間、無機物に宿る“力の本質”が『外気』。

で、この二つを混ぜ合わせた物質が『念粒子』であり、これを燃料にして起きる現象を『異能力』という。

万能エネルギー『異能力』を駆使する『異能力者』。

そんなお前達に通うところが、世界最大級の“異能力者研究兼育成機関”通称『神屠学園』だ。

ちなみにこれらの復習だが、ちゃんとしたレポートにまとめると
フィルマーもビックリの超大定理になるんだが、おい、聞いているか、
おいコラ俺の授業で寝るとはいいい度胸だな、俺はそんな度胸の持ち
主が大好きだ、ぶっ殺しがいがあるからぬああありやあああああ
あああああああ！

「ぎいいああああああああああああっつー！」

表面張力を駆使しなければ零れてしまうほど、いっぱい水を入
れたバケツを両手ずつに持ちながら、廊下の前で授業に聞き耳を立
てていると、男性二名分の雄叫びが聞こえてきた。

また、あのアホの野郎か。

入学初日から、これで何回目になるだろうか、やつが火雷からい 京二きょうじ
の烈拳の餌食になるのは。

嘆息しながら、俺は両耳を閉じようと……つとと、バケツが
あるから出来ねえ。

次の瞬間、耳を塞ぎなくなる程の轟音が鳴り響く。

ドゴオツドゴツドゴオツ、巨人でも歩いてんじゃねえの？ と
疑いたくなる衝撃と爆音の嵐。校舎のあちこちがミシミシと振動す
る。もはや巨人走ってるだろ。

そして十数秒後ピタリと爆撃音は止み、ガラララ、ピシャ、フラ
フラ、バタツ。

教室の扉が開き、一人の男子生徒が放り出され倒れる。

そいつは、なけなしの力を振り絞りこちらを向くと、バツが悪そ
うに苦笑するので、いつものセリフを言ってる。

「お前、学習能力って知ってるか？」

「そっくりそのまま返すよ、良人。また遅刻して。いい加減、本当
に殺されかねないよ？」

そつやって立ち上がる男子生徒の名前は、火巻かまき 行地ゆきぢ。入学以前
からの幼馴染だ。

「にしても、相変わらず容赦ねえな火雷の野郎は。あれだろ？ 超ギリギリ烈拳サンドバックだろ？」

「あれじゃ大人も泣くわけだよな」

火雷 京二。

知識も能力も一級品だが、そのあまりに粗雑で乱暴すぎる教育方法が災いし、俺達のクラス、通称“負け組み”の担任にまで追いやられた問題教師。

最速の“雷”と最火力の“炎”を同時に操る、世にも珍しい“二突型”の超能力者だ。

火雷は、気に食わない生徒には暴力的制裁を加えることで有名だ。生徒を壁際に追い詰め、自慢の烈拳ですぐ側の壁を連打するというもので、生徒に大きな傷を負わせないギリギリの場所を正確無比に打殴しまくるのだ。

そんな絶叫マシンもビックリのショック療法を採用しているアブナイ教師である。

でもって、俺は朝遅刻してしまったため、現在バケツを持って廊下に立たされている。いつの時代だよとか、それ以前に体罰だ。

「よく壊れねえよな、壁」

「火雷が自腹で修繕した特注の防壁なんだってさ」

「ああ、どつりで教室の一部だけメタリックだと思つたら」

入学から三週間目にして明かされる衝撃の事実である。

てか何で教師やってんだ火雷。行くとこ行けば、いくらでも稼げるだろうに。

なんとって“超”能力者様なんだから。

「そういえば、次の授業って能力測定だよな？」

行地が、なんとはなしに聞いてくるが、むしろ露骨にわざとらしい。

「そうみたいだな」

軽く答える。

能力測定か。どうにも憂鬱だな。

やはり俺の言葉に暗いところを感じたのか、はあ、と溜息をつく行地。

ここ『神屠学園』では、学期初めに“能力測定”なるものが行われる。

一人一人の実践的な“能力の強さ”を測定し、学園全体での順位をつけるのだ。それも、大学部高等部中等部小等部、全体での順位である。

例えば小等部の人間でも、順位でさえ圧倒していれば、大学部の人間をパシリにすることも出来るといって、無茶苦茶なシステム。まあ、それは極端な話で、実際は大学部の人間を圧倒できる小等部なんて有り得ないのだが。

そんな有り得ないガキが小等部にいることも、また事実なのだから、世の中どうかしている。

「嫌だよねえ。いい加減にしてほしいよ。そもそも、僕達おちこぼれの順位なんて見て何が楽しいのさ」

「ま、そっちの方が生徒のモチベーションも上がるんだろ」

「僕らのモチベーションは下がるけど、それはいいの？」

「“負け組み”は、そも生徒扱いされてないってこと」

学期が始まる度、まるで決まりごとのように交わすこの会話。何回目になるのかは、能力測定の数さえ数えれば分かる。

もう一度嘆息する行地。昔から溜息の多いやつ。

「ま、そんな気を落とすなよ。お前の下にも下はいるんだ」

「とんだ自虐ネタだね。前回の僕の順位は下から二位」

「俺の順位は最下位、ってな」

俺はハハッと笑い、行地は楽しげな苦笑という器用な笑顔で応える。

それから俺と行地は、チャイムが鳴るまでとりとめのない雑談に興じる。どうでもいいことを、真面目に、だが根本的には適当に、時間を潰す。

例えば、

「頂点は誰にも渡さねえ」

「底辺の間違いじゃないか？」

「俺に並ぶやつがないから頂点だ」

「底辺は辺だからね」

「階級制度は基本ピラミッド型だが、この学園の階級制度はひし形だな。そういえば誰だったか教師が言っていたのを覚えてる」

「一位が上の頂点、最下位が下の頂点？」

「すると横の頂点は誰と誰になるのかって話だ」

「ひし形の中心点をオーとして、エックス座標の判定基準によるね」

「ワイ座標の判定基準は力の大きさだな」

「エックスの方はなんだろうね」

「ひし形だから、一位と最下位のエックス座標はゼロ。更に言うと、横二つの頂点のエックス座標は、それぞれ絶対値がマックス」

「つまり？」

「エックス座標は、一位と最下位が持っていない値ってことだ。：

…お前は何か入ると思う？ 行地」

「普遍性、じゃないかな？ この場合、エックス座標のプラスマイナスは無視して、絶対値の大きさの話で。だから横の頂点二人は、もつとも能力が普遍的なやつ」

「その仮説だと、つまり一位と最下位の異常性はマックスになるのか。そういえば、確かに上か下に突出したやつほど変な能力者が多かった気がしなくもない」

「やーい、異常者異常者ー、超異常者ー」

「お前も俺に限りなく近いんだぞ？」

「……」

「ああ」

とか、

「人間の魂つてのは、どこにあるんだろうな」

「またそんな抽象的な。脳でしょ」

「いや、思考する器官と魂がイコールで結べるとは限らないんじゃないか？」

「僕、魂の定義とか知らないから、なんとも」

「ていうか、身体は脳を生かすために働かされているのか、脳は身体を生かすために働かされているのか、どっちだろうな？ より上位に位置する方に、魂つてのはあるんじゃないか？」

「どっちもどっちでしょ。脳は動けないし、身体は思考できない」

「あ、じゃあ全身に万遍なく魂が入ってるとか。足を取っても腕を取っても脳を取っても魂は欠けるってことでどうだ」

「でも脳は取ったら死ぬけど、腕は取っても死にはしないよね。死ぬってことは魂なくなるってことだから、やっぱり魂は脳にあるんじゃない？」

「それを言ったらお前、逆も言える。“身体を取ったから死んだ、つまりそれは身体に魂があるからだ”って言ってるのと同じだ」

「言われてみれば、脳を取った直後はまだ身体の方は生きてて、身体から魂がなくなるのは、脳が無くなったことによつて身体の方も死ぬから、だね」

「要は、全身魂だ」

「で結局、魂つて何？ 美味しいの？」

「少なくとも人間の魂は不味いだろ」

「悪魔は舌が悪いね」

とか、

ぶつちやけ意味不明過ぎる会話である。なかばこじつけだし。

時間を潰すためだから、意味なんてどうでもいいんだけど。

やがて会話のネタもなくなり、お互い口を開かなくなつてから五

分ぐらい経ったあたり。

ようやく終業のチャイムが鳴る。教室のドアが開き、クラスメイ
ト達が、俺達に様々な表情や感情、言葉を向ける。

ある者は哀れみ、ある者は共感。

ある者は卑下、ある者は苦笑。

多種多様だが、共感と哀れみの表情が多いのは、ここがおちこぼ
れクラスであるからだろう。

大抵のやつらは、俺や行地に負けず劣らずの境遇だ。一部の見下
す人間は、この中では能力の強い者か、あるいは自分がおちこぼれ
だと認めたくない者。

どれにしる、皆等しく滑稽な人間である。

その中には例の妹似の美少女、奈々乃^{ななの}、美羽^{みう}も含まれるわけで。
調度、出てきた奈々乃と目が合う。

奈々乃は数秒わたわたしてから、ペコリと九十度、よしコイツの
あだ名は三角定規に決定しよう、と血迷うくらいには綺麗な九十度
別に会釈でいいだろ。

「では」

とだけ言い、ぱたぱた去って行ってしまふ。おそらく女子更衣室
に向かったのだろう。次は能力測定の授業だからな。

そんな俺と奈々乃の微妙なやりとりを、眉間に皺を寄せて観察し
ていた行地は、

「り、良人が……お、女の子と、仲、良く？ ……実は……あの子
は男だとか？」

パンツ。

「はたくぞ」

「過去形だよ！」

パパンツ。

「い、痛っ！ 何でまたはたくのさっ！」

「はたくつつつたる？」

「未来形でもあったんだ……」

不満そうに俺を睨む行地。

そりゃ、んな失礼なこと言われたら怒るわ。

「おい、どクスコンビ」

又ツと、渋面の担任教師火雷が教室から出てくるなり俺達を睨む。おつかねえ。視線だけで虫とか殺せそうだ。

あの目は絶対に何人が殺っている目だな。うん、絶対そうだ。阿修羅も引く阿修羅顔だ。

「……今、俺の顔見て何を思った？ どクス」

「天使のような優しさと包容力に満ち溢れた、いや、もはや女神的に素晴らしく神々しい阿修羅顔だと思っただけであります、教官」
ガッツ。

「ギャツ」

「肝心なところで正直なやつだな teme は！」

いってえ、殴られた。

能力は使用していないが、それでもこの筋肉馬鹿、これで手加減しているらしいのだから、一体どんな腕力してやがる。

「まあいい、次は能力測定の授業だ、服を着替える。言っておくが遅刻したら……分かってるだろうな？ サボるなんてもつての他だ！」

ニゴオオ、満面に笑む火雷。ある意味怒った顔より何倍も怖い。

俺と行地は、互いに目を見合わせ、

「サー、イエッサーであります！ 教官殿！！」

「良い返事だ！ 褒美に後で拳を一つくれてやる！！」

……どうしろと？

三話

“得意能力”と“補助能力”の違いは分かるよな？

分かってなさそうな顔の超どクスが居るな、臨時復習だ。

能力者の才能は、基本的に一つだけに偏っていてな、生まれつき伸びやすい能力が決まっている。その伸びやすい能力が“得意能力”だ。それ以外の能力は全部“補助能力”。オマケだ。

“補助能力”も伸ばそうと思えば伸びるが、“得意能力”に比べれば十分の一度しか成長しない。だから俺達の一つの能力に絞り訓練していくことになる。

まあ、こんなもんだ。そろそろ授業を再開するからな。

これから能力の測定方法を説明する。

よく聞いておけよ、どクスども。テメエらどクスの脳みそは食用ミソで出来ているから人間様の言語が理解出来ないのはよく分かるが、そこは脳を最大加速させて各自補え。ミソでも億回回転させれば何かの足しにはなるだろう。

あそこに正方形のブロッコが見えるだろ？ あれが測定器だ。

一言で説明すると、あれに全力で“得意能力”をぶつける。それだけでいい。そうすることによって、自動的に“補助能力”の値も逆算し読み取ることが出来る。

どうだ、どクスでも分かる火雷先生の簡略講義は。

本当なら、エジソンもビツクリのウルテクが使われていて、もつとコツだとかやり方があるんだが、テメエらどクスに言っても無駄だろうな。

つうわけで、俺が今から手本を見せてやる。その節穴かっぼじつてよく見ておけ、節穴でも億メートルぐらい見開けば何かの足しにはなるだろう、おい、聞いているか、おいコラ俺の授業で寝るとはい度胸だな、俺はそんな度胸の持ち主が大好きだ、ぶっ殺しがいいからぬああありやああああああああああああ！！

「ぎいあああああああああああつっ!!」

能力測定 of 授業中。

火雷からいに連行されていく悪友、火巻かまき 行地ゆきちを、俺は体育座りで見送る。

「た、助けて良人！ 殺される！ 殺されるっ!!」

学習能力の備わっていない哀れな悪友に、俺は親指を立て、

「グッドラック」

更に親指を反転し下に向け、

「地獄で会おうぜ！」

「なんでそんな良い笑顔で……」

そこで行地の絶叫は途絶え、代わりにドゴオドゴドゴンッ、行地のすぐ横にある測定器を連打する火雷の拳。

普通に爆風が行地に直撃している気もするが、そこはそれ、さすが凄腕教師にして超能力者、ちゃんと深手は負わないよう調整している。大事はないだろう。

うん、大事はないだろう、きっと。大事は、ない、はず。

……。

南無南無。

クラスメイト達の合掌と爆音が鳴り止み、こちらに戻ってくる担任教師。バツクの煙が妙にマッチしている。

かつて測定器だったソレが『測定不能、測定不能』とピーピーわめいている。

「こんな感じだ」

どんな感じだ、とは口が裂けても言えない。クラス一同引いているが、全員ピツと、

『サー、イエッサーであります!!』

軍隊ばりの敬礼である。ここ三週間ですっかり染み付いてしまっていた。

それから一人ずつ能力の測定が行われていく。つっても所詮は落ちこぼれクラス、全員が全員E判定ばかり。ランクはS、A、B、C、D、Eの六つあるが、そのうちのEだ。

更に“測定不能”というのもあるが、これは論外だろう。それ即ち“超能力者”の域である。

軒並みA級能力者以上の集う特級でも数人しか存在しない“超能力者”。そんな法外な力をもってしなければ辿り着けないランク“測定不能”。

通常の間では、夢に見ることすらおこがましい、天より上のランクだ。ましてやこんな雑魚の集まりが出せるはずもなく。

だからこそだろう、今日このクラスの能力測定は驚愕の結果となる。

出てしまったのだ。“測定不能が。しかも数人”。

測定不能一人目、あじぎ 篤木 あじち 庄土。

「ふむ、軽くやるかの」

篤木 庄土。

その学生とは思えない、老練の兵士のような悟った雰囲気と、その学生とは思えないオッサン顔が特徴の大柄な男子生徒だ。

というか本当にコイツは生徒なのだろうか。あの白髪交じりの毛色は生徒のものなのだろうか。

年齢査証って案外簡単なのかも的なことを邪推していると、クラスメイト達の間になじめがはしる。何事かと皆の視線を追うと、それは篤木の身体に集中していた。それを見て、俺も少し驚く。

あの独特の光方は、念粒子か。

念粒子は通常、人の目で視認することは出来ない。それが、こうして目に見えるほど、念粒子の凝縮された光の粒があいつの全身を

覆っているのだ。こんな芸当、訓練したって到底出来るものではない。

こいつはもしかして、もしかするかも知れない。

「篤木流拳術道場師弟、篤木 圧土、いざ参らん！」

何だか仰々しいことを言い放ち、凄まじい踏み込みを見せる篤木。踏みしめた地面が掘り返されるほどに、力強い豪走。「あのどくズはグラウンド整備の刑だな」と火雷が呟くほどに、力強い豪走。計測器は一体、どのような値を示すのか、クラスメイト達から期待の眼差しが向けられる。

「喰らえい『^{ドレピングパウダー}筋骨流粒』、必つさ……ぐおおおおおおおつっ
！！」

ずざあああああああああああああつっ。

自らの踏み込みで砕いた地面に足を取られ、思い切り地面を滑る篤木。なんとも素晴らしいスライリングを見せてくれるじゃねえか。軽く測定器を通り過ぎていったが、大丈夫かあいつ。

「ぐおおおおおおお！ 皮が！ ワシの皮がああああああ！」
この日から篤木のあだ名は“摩り下ろし大根”になったという。

『測定不能、測定不能。能力を使用して下さい、能力を使用して下さい』

測定器が嘲笑うかのように鳴り響く。

測定不能二人目、彦星^{ひしほし} 香苗^{かなえ}。

「ツッチー……もう少しやりようはなかったですか？」

「む、むう、すまぬ……。少々露骨過ぎたかの……」

「やり過ぎです。馬鹿丸出しです。部下失格です。豆腐の角に小指

ぶつけて爆散すればいいです」

「うう、殺生じゃ、香苗殿」

何を話しているのかは聞き取れないが、シユンと落ち込む篤木。まあ、あの二人はいつもあんな感じだ。

それにしても、同じ敬語口調でもえらい違いだな、彦星と奈々乃は。彦星の言葉には常に毒が塗つてある。

「仕方ないです。香苗がE判定の手本を見せてやるです」

「指導鞭撻の程を願う、香苗殿」

ピツ、と巨漢の篤木が超小柄の彦星に敬礼する様は、なんとも壯観である。どうでもいいけど、何故あんなに敬礼が似合うんだ篤木。本当に老練の兵士なんじゃないか？

「では、行くぜです！ 『テレバシーボディ異信伝身』！」

声高々に妙な掛け声を上げると、一転静まり返り、目を瞑る。

集中しているのだろう、周りの景色と一体化しているかのような自然体……って、あ？

彦星の姿が消えてしまった。本当に景色に溶け込んでしまったのか、どこにもいない。ついさっき立っていた場所には足跡だけが残っている。

「……はーっ……はーっ……」

しばらくの時間が経ち、パツと姿を現す。何故か肩で息をしているが、何がしたかったのか全く分からない。

「しまったです！ 香苗の能力は完全受動型です！ 放出とか可能です！」

完全受動型？ そんなもの聞いたことがない。そもそも、例え攻撃不可能な能力でも、その能力によって何かしらの変化さえ与えれば測定は出来る仕組みのはずだ。

何はともあれ『測定不能』の機械音が鳴る。篤木と同じで、この場合の測定不能はE以下なんだらうな……。
「ご愁傷様。」

測定不能三人目、奈々乃ななの美羽。

「はわわわわ」

はわわじゃねえ。

何がそんなに彼女を不安にさせるのか、キヨロキヨロ右見て左見て右見て、よしコイツのあだ名を横断歩道にしよう、と血迷うぐらいには拳動不審だ。

「え、ええと、お、お手柔らかにお願いしますっ」
ペコリ。

おい、ついに測定器にまで挨拶し始めたぞあいつ。いくらなんでもテンパリ過ぎだ。

くそう、イライラする。ああ、イライラする。

あの顔であんなに不安そうな顔しやがって、あああイライラする！
俺は見兼ね、「落ち着けアホ」と声を掛ける。

「あ、はい間違えましたっ。お手柔らかに参りますっ、ですね」

頑張りますっ、とでも言いたげに、胸の前で両手をグツとする。

いや、お嬢さん、そういう問題じゃなくてだね？

というか、お手柔らかに参りますって何だ。あれか。手加減しませぬ的な意味合いか。

なんにしてもアホな子である。

再び前を向き、測定器と相対する。

奈々乃は両手を前に出すと、念粒子を練るために集中する。あの構え方は、おそらく放出系統だな。

にしても、へえ、集中力はなかなかのものだ。

「えいつ」

ちよろちよろちよろちよろちよろちよろ。

威力はミソカスだがな。

小さな掛け声と共に、奈々乃の目の前の空間から放出される水流。いや、あれを水流と呼ぶのはおこがましいか。

ホース程度、いやいや、ジョウロ程度、いやいや、あれはそう、もはや湧き水のレベルだ。

あれで一体何をしようと言うのか。お花さんにも水をあげるつもりなのか。

「んんんっ」

力を込めているようだが、特に水の出が増すわけでもなく、相変わらずちよろちよろな湧き水。

これは、ど級の低能力だ。見るに耐えない。

だが、奈々乃の足元の水溜りが、それなりの大きさに成長し始めた頃。同じく、見兼ねた担任教師が声を掛けようとした頃。

ザザザザザザザザザッ。

蠢いた。水溜まりが。

水溜りだったものは、奈々乃の意志に應えるように、その形を整え始める。

まず半径五十センチ程のドーム状の水溜りが出来上がり、水のドームは徐々に徐々に流動していき、何かの形を模そうとピチャピチャ蠢く。

校舎が出来、体育館が出来、寮が出来、窓が出来、木が出来、人が出来、徐々に徐々に“あるもの”を模していく。

これは……ちよつと凄いな。思わず感心してしまう。

『おおー』

クラス一同も感嘆の声を漏らす。ほう、と火雷が口の端を上げているのだからビックリだ。

そして、完成する。

奈々乃が水で創造したもの、それは、

「“ここ”か」

つまり、異能力者研究兼育成機関『みとがくえん神屠学園』の完全模写だ。

ちゃんと人や鳥まで動いていて、校舎の中まで形作られているところが凄い。

そして驚くことなかれ、これを何も見ずに造ったということは、

“『神屠学園』の構造を完璧に記憶している”ということである。

これだけ大きな学園を完全把握だ。それがどれだけ途方もないことかは考えるまでもない。

「で、出来ました。これが私の能力、『ビュアドール愚天使』です」

ちなみに、特徴ある能力には、“能力名”が授けられることがまある。命名者は学校の教師や親、師、友人と様々で、能力だけでなく、その能力者本人の人柄や本質にちなんでいることもよくある。篤木と彦星の叫んでいたアレもたぶん能力名だろう。

『ビュアドール愚天使』……か。

命名者は一体どういった意味を込めたのか、特に意味はないのか。まあ、もし意味があったとしても、あまり良い意味では無い気がする。

……何でもいいか。

気を取り直し、再び奈々乃を見やると、おっと、目が合ってしまった。

やりましたっ、とでも言いたげに胸の前で両手をグツとする。

いや、しかしお前、測定器には何の変化も与えてないからな？

『測定不能、測定不能。能力を使用して下さい、能力を使用して下

さい』

「はわわわわ」

はわわじゃねえ。

どれだけ記憶力が良かろうと、やっぱりアホな子はアホな子だ。

測定不能四人目、火巻 行地。

「ここからは僕のスーパー行地タイムさっ!」

「お前、それ言っつて恥ずかしくねえ? てか今までどこ行っつた?」

「ずっと気絶してたよ。まったく酷いじゃないか見捨てるなんて」

「てか生きてたんだ」

「酷いっ」

「地獄は楽しかったか?」

「勝手に死んだことにしないで」

「逆に何でまだ生きてんの?」

「酷いっ」

一通りの馬鹿会話を終え、測定器の直線状に立つ行地。

ちらちらとこちらを見てくるのが腹立たしい。なんだあいつ。殴ってほしいのか。

ギロと火雷に睨まれ、ビクツと前を向く。しっかりと調教されてしまっている。早く始めないコイツが悪い、というか大体いつもコイツが悪い。

すーっはーっ。

大きく深呼吸をし、右手を構える行地。なんか様になってはいるが、認めたくないの認めません。

コイツの得意能力は、『属性能力』の中でも特に威力の高い炎属性。

『属性能力』つつうのは、火や水などの自然物を操る系統の能力

破壊の爪痕を残す。

灼熱の焼痕を残す。

愚鈍に、重厚に、圧倒。

暴虐に、暴拳に、暴走。

測定器なんてちんけな小物は、風に吹かれた木の葉のように舞い散り。

常識なんてちんけな現実には、悪夢に囚われた病人のように舞い踊り。

その威力は枚挙に暇がない。

皆、啞然とする。

あの火雷ですら目を見開き思考停止している。

無理もない、知っていた俺も、行地ですらも愕然としているのだから。

「……あ……あ……」

火炎の能力者は、その目に何を映しているのか、酷く怯えていた。そして、

水操の能力者は、その目に何を映しているのか、酷く笑んでいた。……なんだこいつ？

「！ くそっ」

我に返ったのか、火雷が咄嗟に念粒子を練る。

両拳に爆炎を宿し、全身に雷光を纏い、俊足の超能力者は、まだ歩みを止めない特大火球に向かって特攻する。一瞬呆けてしまったとはいえ、この判断力はさすがエリート暴力教師と言ったところか。アレを止めなければ、更に被害は拡大してしまう。

不幸中の幸いにして、火炎弾の速度は自転車並。あの超能力者教

師のスピードにかかれば、追いつくことは容易い。

予想通り、火雷は火炎弾の後ろに回りこむと、拳の炎を一層強め、手加減なしで殴りつける。おそらく、一番脆い箇所を正確無比に。

ズドンッ、

一回目のクリーンヒット。

ズドツズドン、ズゴッ、ガゴッ、

二回目、三回目、四回、五回、六回七回八回九回、十、十一、十二、十三十四十五十六……、

一発でトラック一つを破壊出来そうな重い烈拳を、何度も何度も、何度も、加速度的にジャブは速くなる。

衝突音が、ドゴッドゴからドドドドに変化する頃、ようやく火炎弾全体をひび割れが覆いつくし、爆裂する。

チュドオオオオオオン、という轟音に、皆安堵の溜息をつく。

力と力が相殺されたことにより、爆発は今の程度で済んだ。高等部の校庭にばかりクレーターが出来てしまったが、まずは脅威が去ったことに胸を撫で下ろす。

「修繕費とかヤバイんだろうなあ……」

どうでもいいことを嘯き、自信を落ち着かせる。いやどうでもよくはないが。

ところで火雷は大丈夫だろうか。いくらヤツでも、あの爆風に巻き込まれればさすがに……。

その心配は杞憂に終わる。

「あっちーな、チクシヨウ！ くそっ、どうすんだよこの背広、使いたいものにならんど！ 高かったんだがなあ。後であるアホに拳と請求書叩きつけてやらんと……。まったく手の掛かるとクズめ！」

ブツクサ言いながら、何事もなかったかのように、いつもの渋面

で炎の中から出てくる。

今ならこの人を英雄と呼んでやってもいい。

当の本人、行地はというと、

「……………！……………あ……………！……………ああっ……………！」

恐怖に支配された顔で、過去の事件でも思い出しているのか、うずくまり何事か呻いている。

仕方ないやつだ。ちよっくら気付けどもしてやろう。

「おーい、こら起きろー、行地さーん？」

とりあえず頬を掌で往復しておく。

スパパパン、うん、いつもの行地の頬だ。実に良いはたき心地で。

「いたっ、いたたたたた、痛い痛い痛い」

「ほれほれほれー」

スパパパパパパ、

「ちょ、おまつ、いた、待て、痛いって、い、いた、や、やめ、痛い痛い、やめろ、いたいたいた、やめろーあああああああああああ
あああ……………」

あ、キレた。

「うおつとと。貴様の攻撃なぞ当たらんよ、フハツ！」

ヘナチヨコパンチが飛んできたので、軽くいなしておく。はん、
蠅が止まって見えるな。

「おま、良人、お前！それが傷心中の幼馴染に接する態度！？」

「ふっ、手を差し伸べてやっただけさ」

「ビンタしてただけでしょ！？」

「いや、見ようによつては手を差し伸べていたようにも……………」

「見えないっ！」

「そりゃただの往復ビンタだしな」

「開き直るな！」

よしよし、ノーマル行地復活だ。

まあ全身擦り傷だらけなことを除けば無傷だな。俺は行地の身体に怪我が無いかを確認し、右手を差し伸べてやる。

「ほれ」

「……え？ あ、ああ、うん」

虚をつかれたのか一瞬驚き、俺の手を取り立ち上がる。まったく世話の焼ける阿呆め。

行地は落ち着いたし、火雷は生きてたし、まあ良かったが……さて。

問題は、この目の前のクレーターだ。

どうして行地の能力が暴走した？

四話

神屠学園、一年十五組所属、火巻 行地。

能力名『いい火滅』。感情の波に同調し、その威力を高める。通常の火力は市販ライター程度。危険度ゼロ。過去の大量殺戮“紅海事件”の加害者。その頃に大きな心的外傷を負う。

「ふん……紅海事件、か」

夕日に照らされた室内。一人の洗面教師が、ただでさえ渋い顔に、また一つ皺を増やす。また一つ苦悩を増やす。苦渋は彼の原動力であり、また重圧でもある。

……俺のどクズ生徒どもが、妙なことに巻き込まれている。

火雷は、違法にアクセスした神屠学園データベースを睨みつけ、思考する。

……ようやっと学園暗部の情報をつきとめたはいいが……どうなってやがる。

今日、火巻の能力が暴走した。

何故だ？ この情報を見る限り、確かに火巻が“紅海事件”の加害者だというのなら、あの火炎弾の威力にも頷ける。だがこの数値を見る限り、ここ数年の火巻は落ち着いていて、あれだけの暴発を起こすことは有り得ない。

元々コントロールが利かなかつたため、多々暴発することはあったそうだが、だからといってあそこまでの暴発を引き起こすことはないだろう。

誰かが裏で糸を引いていない限りは、か。

ここは、特別指導クラス準備室。

神屠学園は、一クラス一組から十五組に分かれていて、その中でも選りすぐりの低能力者を集めたのが、“負け組み”と揶揄される特別指導クラス、十五組だ。

特別指導クラスの担任は、一人につき一つの準備室が与えられている。ここならば学園の目が届かず、かつ学園内部から情報を漁ることが出来る。更には、火雷の私室としても重宝されていて、部屋のあちこちには特製の監視カメラや警備装置、ロック、ブービートラップ、迎撃システム、ジャマー、あらゆる対策が施されている。烈拳の喧嘩屋は、存外に器用なのだ。

準備室という名の城で学園の情報を漁ること数年。

学園という名の人体実験所で暗部の情報を漁ること数年。

少しずつ、徐々に、地道に、微細に、淡々と、学園の裏を、暗闇の断片を、収集してきた。

そしてついに積み上げた。塵の山を。

ついにつきとめた。学園のデータベースを。

……確かに俺は、一つ一つこの手で、やつらの目を掻い潜り、確実に情報を集め、このデータベースにアクセスするまでに至った。他にも、いくつかの裏情報も入手している。

だが妙だ。何かが引っ掛かる。何かが不自然だ。何か得体の知れない悪寒を感じる。

菌茎に刺さっていた小骨が、実は超小型時限爆弾であるかのように。

腕に留まっていた蚊が、実は次世代生物兵器であるかのように。

……俺はどこか、決定的に道を間違えてはいないか？

火雷の恐ろしさは何も、超能力者の域にまで達した戦闘力や、かつて鬼童とまで謳われた知能や行動力だけではない。その気性の荒さ、豪胆さ、大胆さ、野生さ、本能、カリスマ、それらが混同さ

れて形成された、恐ろしいまでの勘の鋭さにある。

……いや、さすがに気のせいかな、いくらなんでも心配性過ぎだな。俺は完璧にやってきた。見落としは無い。例え多少の穴があつたとして、そんな小さな穴を埋めるぐらいなら目の前の宝箱に向かった方が有益だ。これはその程度の杞憂だ、気にすることは無い。

だが、そんな勘の鋭さをもつてしても、学園の卑策からは逃れられない。

火雷は学園のデータベースを読み進める。学園の垂れ流す、無味無臭の毒ガスに首を傾げながらも、決してそれに気付くことはなく、いつの間に脳が、学園の垂れ流す毒電波に侵されていることに気付くことはなく。

火巻 行地についての秘匿情報を一通り読み終わり、次の項目に目を移す。

篤木 あしき 庄土 あしち
彦星 ひこぼし 香苗 かなえ

いつも一緒にいる二人組みの男女。

この二人のプロファイルは前々から調べてはいた。

学園の至るところに残されている痕跡を辿ると、何故かこの二人に終着することが多々あるのだ。

だがそれに反し、ベースに刻まれたデータには何の変哲もない。いや、いくらか奇特な人世を歩んではいるが、学園の根幹に関わるようなコレといったものはない。

そもそも奇特な人世なら、十五組のほとんどの生徒が歩んでいる。そういうクラスなのだ。

篤木と彦星のことは、とりあえずは保留し、今はとにかく情報の

インプットにいそしむ。思考することならいつでも出来るが、データベースにアクセスしてられる時間は限られているからだ。この機を逃してしまえば、次に拝める日が何年先になるのか分かったものではない。

それで本当に読めているのかどうか疑問に思うほどの速さで、P
C画面はスクロールしていく。

火雷が今最も詳細を欲している生徒は、火巻、篤木、彦星以外にも七人居る。

戸川 とがわ 伊織 いおり。三年。

衣瓦 いがわら 轍之助 てつすけ。三年。

元次 もとつぐ 渡 わたる。二年。

織姫 おりひめ 祈 いのり。二年。

全員、特別指導クラスの生徒だ。

こいつらは篤木 圧土と彦星 香苗同様の理由で前々から目を付けていた。

さらに、特別不可解な特別指導生徒、

異無 ことなし 良人 りょうと。

奈々乃 ななの 美羽 みう。

そして……時旅 ときたび 葉 よう。

これらの情報は絶対に手に入れておきたい。

火雷は冷静に、迅速に、インプット作業を遂行していく。
だが、

目の前に突如として現れる銀色。

「……あ？」

思わず間拔けた声が漏れてしまう。
なんの前触れもない理不尽に、思考回路が途切れてしまいそうになる。

目の前の、正しく目の前の、“画面から飛び出ている銀色の刃”を視認する。

瞬時に理解する。

何者かのナイフが、PCを貫いたのだ。

怒りが沈殿する。冷静が沸騰する。

おい……おい、おい、おいおいおいどここのどクズだおいっ！！

もう少しで、数年探し続けていた学園の裏を、暗部の表を、やつらの尻尾を、捉えることが出来ていたかもしれない。

あともう少しで、あと一歩でっ。

そんな激動も一瞬にして冷やしてしまうのだから、なかなかどうして有能過ぎる。

火雷は刹那の間に感情を抑え、周囲を確認する。現状の把握に取り掛かる。

まず、どうやって侵入者は、“そもそも浸入出来たのか？”。

この部屋は既に俺の要塞と化している。そんなじよそこの機密機関よりは嚴重に、セキュリティは整えてある。異能力者対策も万全だ。この中で俺以外の能力の発動は出来ない。能力解除で部屋を覆っているのだから。部屋に浸入しようとするれば、必ず能力解除に触れなければならない。これに触れば、数秒だが能力の発動が一切不可能になる。そんな状態で入ってみる、部屋内のセキュリティを掻い潜ることは絶対に出来ない。チャフ発生装置も、セキュリティの管理装置も、全部部屋内にあるのだから遠隔操作で弄ることは無理。電波遮断だって正常に働いているから、尚の事無理。大体、ただでさえ浸入経路は扉一つしかない。あそこのロックは一際嚴重だ。

窓も全て特殊念粒子ガラスで暗幕も閉めてある。もし能力解除が無スキルチャフかったとしても、もしセキュリティが無かったとしても、もし部屋のロツクを掻い潜ることが出来たとしても、そもそもこの俺が気付かないわけがない。虫一匹の反応だって感知できる。ましてや人間なんて気配の分かり易い物体を逃すはずが、あるわけがない。例え出来たとして、例えそれらの関門をクリアすることが出来たとして、いつこのナイフはPCを貫いていたんだ。こんなものが飛んでくれれば、俺でなくても気付くだろう。

次々と現状を羅列していく。

だが分かったことは、“分からない”ということだけ。

数々の侵入者否定要素は、目の前にある一本のナイフに敵わない。PCが破壊されたという事実には敵わない。

敵の能力も、正体も、どこにいるのかも、分からない。

しかし止まってはられない、呆けてはいられない。起きてしまったのなら仕方がない、分からないが、分からないなりに全力対抗してやろう。

気を取り直し、というよりも、なかば開き直り、敵の気配を探る。もしかしたら、気配を完全に絶つことの出来る、人間という名のバケモノが浸入して来ているのかも知れないが。

部屋全体をチリチリとした気が漂う。

いや、気ではない、念粒子だ。百戦に錬磨された能力者は、念粒子自体を、即席の触覚のように応用することも出来る。

……いない。

直後だった。死ぬと確信したのは。

「ごめんね」

……はっ？

「こうでもしないと良人は死んじゃうから。あんまり学園に踊らされないよう、気をつけて」

「だ、れ……だ」

声が干上がって出てこない。

悲壮に満ちた、鈴のような透き通った声が、火雷を困惑の穴に眨める。

苦し紛れの対抗策として、臨戦態勢に入っていた異能力を開放する。

だが、既に声とナイフの主は消えていた。

それは“逃走”というコマを跳ばしたかのようで。それは“浸入”というコマを跳ばしたかのようで。

文字通り、手も足も出なかった。

それから何秒経っただろうか。

何分経っただろうか。

はたまた何時間経っただろうか。

ハッと、自分がまだ生きていることを認識した。認識できる、身体があった。

皮肉なことに、超能力者、火雷 京二は数年ぶりの安堵に満たされる。

「……く、くくっ、はっははは」

まだまだ俺も力不足ってわけか。
こんなところでしくじるとはなあ。
だが、

……こうでもしないと良人は死んじゃうから。あんまり学園
に踊らされないよう、気をつけて。

なかなか興味深いことを聞いた。

踊らされていた、か。

はっ、お前こそ踊らされているんじゃないのか？

悔し紛れの、苦し紛れの独り言。
特に意味はない。

果たして、今この時、俺は踊らされているのか。それともそうで
ないのか。

「また一からやり直しだな」

教師は一人、自嘲する。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9760w/>

最強の無能力者

2011年9月27日08時25分発行